



泉山磁石場

泉山の磁石場の前に立つと、まずその奇妙な景観に驚かされます。削り取られて切りたった岩盤。黄色い岩肌。ぽっかりあいた数個の穴。本来ここには一つの山があったと考えられる所ですが、磁器の原料となる白磁鉱が発見されて以来、約 400年間掘り続けられた結果がこの姿です。

金ヶ江家文書「乍恐某先祖之由緒を以御訴訟申上口上覚」には、金ヶ江三兵衛（李参平）が泉山に陶石を発見したと伝えられています。また、皿山代官旧記覚書「諸手当一通・安永式巳年日記（1773）」には、家永正右衛門によって発見されたと記されています。いずれにしても、泉山の陶石の発見が直接のきっかけとなって、有田で磁器の生産が始まりました。

江戸時代、この陶石は皿山代官所によって厳しく管理・統制されていました。最も鉄分の少ない上質のものから順に藩窯専用、次に内山用、そして外山用、さらには大外山用と供給先もはっきり決められていました。

現在は石場組合によって管理され、毎月定められた量が採掘されています。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報

No.12

皿山の風物



煤(すす)払い

有田の年末に行われる行事の一つに「煤払い」があります。煤掃きとも呼ばれる一年の締め括りの行事です。「煤払い」は全国で見られる行事ですが、焼き物の里である有田は特に火と水を扱いますから、神事の色合いも強いようです。窯焼きは翌年の窯の出来を祈り、また商人は商売の繁盛を祈りながら、それぞれ新たな気持ちで新年を迎えます。

今回は今泉今右衛門さんの「煤払い」を紹介します。毎年、12月30日になると、水引きを張り白紙をつけたササで、各仕事場の一年の「煤」を払います。細工場ではその日の午前中から、染付座や赤絵座で

は午後から始めます。細工場はその仕事から、煤を払うのに時間がかかるそうです。

まず、自分の座の片付けを済ませ、仕事場内のあらゆる場所の掃除をします。以前は自分の持ち物（例えば座布団など）を持ち帰って洗ったりしていたそうです。というのも戦前から戦後にかけて、職人は1年契約でその契約更改が年末に行われていたことも関わっています。つまり、その翌年の一年の給料の交渉が終わるまでは、翌年も同じ職場で働くかどうかかわからないのです。腕のいい職人は賃上げを要求しますし、その攻防が12月31日に繰り広げられます。成立するのに元旦の朝までもつれ込むこともあったそうです。給料の前借り分を受け取ることが、翌年一年の契約の成立を示します。前借り金は翌年に均等割りの12回払いで給料から抜かれていました。明治時代には、前借り金がなくなるまで遊んでいて仕事にとりかからない者も多かったという話もあります。

また、年末には一年の支払いなどの仕事に追われ、とても御節料理を作る余裕などなく、生もの主体の正月料理になってしまい、それが定着したそうです。

「師走」日本全国なんとなく気忙しい季節ですが、有田はとりわけ忙しいようです。窯場で仕事初め（車おろし）が他地域より比較的遅いのも、この年末の忙しさと前借り金があった時代の名残によるものかもしれません。



皿山の味



陶助おこし

今回は有田の代表的なお菓子「陶助おこし」を紹介します。作っていらっしゃるの、泉山の前田陶助堂のご主人・前田光春さんとそのご家族です。

この「陶助おこし」はいつごろから作られていたのか詳しいことは分かりませんが、すでに100年以上は作り続けられているそうです。前田さんが作り始められたのは、今から33年ほど前のこと。陶助さ

んとおっしゃる親戚のおじいちゃんが作っていらしたのを、その奥さんから教えてもらったことに始まります。

「詳しいことは教えられませんが……」と前おきのあと、簡単に作り方を説明してくださいました。まず、餅をついて干し、小さく切ります。それをいって餅米のジュル（水アメ）と砂糖をからめます。そして最後にしょうがで風味をつけて出来上がりです。

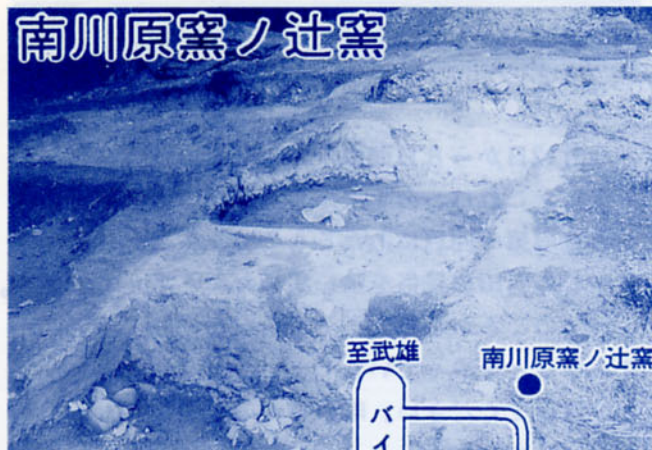
口の中に入ると、とろけるようなやさしい味です。前田さんの微妙なさじ加減がおいしさの秘密です。出来上がるまですべて手作業で、手作りのあたたかい味が売りものになっています。「めいっぱい作っても1日に1000個が限度。お盆やお正月のころは、帰省のお土産用として買う人が多くとても忙しいんですよ。」と話してくださいました。有田のなつかしい味、いつまでも作り続けてください。

皿山風物詩

No.12

有田陶器史資料館

南川原窯ノ辻窯



今回は南川原窯ノ辻窯です。今夏、7月から9月にかけて駒沢大学倉田教授の指導の下、駒沢大学の学生を中心に発掘調査は行われました。連日の炎天下で、汗にまみれての調査でした。倉田教授は20数年前の天狗谷古窯跡発掘調査の時、調査主任をされた方で、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。

南川原窯ノ辻窯は以前、九州陶磁文化館によって一部調査されています。その時には17世紀末～18世紀にかけての優品が出土しています。また、文献の上にも「下南川原登」という名で元禄時代（17世紀末～18世紀初）以降の文献に、しばしば登場し、当時の様子を垣間見ることができます。

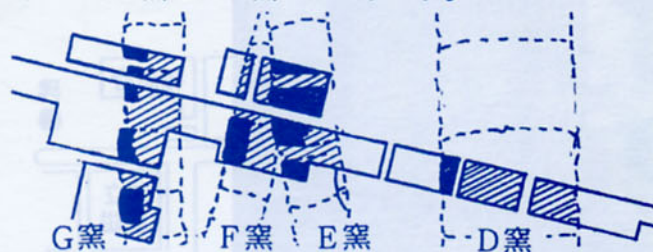
例えば、『皿山代官旧記覚書』の文化11年（1814）には14番すなわち14室の焼成室からなる登り窯であると記されています。次に元治元年（1814）の絵図を見てみましょう。南川原窯ノ辻窯の位置に6室の窯が見られます。現在、地表に人の背丈ほどの高さの窯壁が残っていますが、それが絵図にある窯だと思われます。何らかの事情で文化11年から元治元年の間に14室から6室に縮小したことがうかがえます。また、絵図には窯の上の方に建物が見えますが、残念ながら今回の調査では明らかにされませんでした。今後は窯、物原だけでなく、その周辺の施設も調査する必要が出てくるでしょう。

横断試掘溝で4基の窯跡を発見

さて、今回の調査ですが、まず南北方向、すなわち窯を横断するように、長く帯状に地面を掘り下げました。地面に埋まっている窯の概要をつかむためには有効な方法です。調査前、窯跡付近で採集した陶片から、窯の年代はもっと遡るのではないかという推測がされ

ていましたが、調査が進むにつれて未発見の窯跡が次々と発見されました。

結局、地表で確認されていた窯以外に新たに3基の窯跡が発見され、少なくとも4基以上の窯が、この南川原窯ノ辻の窯場で順次築かれていったことがわかりました。北からG、F、E、D窯と名づけましたが、年代もその順番であろうと思われます。現在、地表に残っている窯壁がD窯にあたります。



窯の順番がどうしてわかるのかと言いますと、G窯がF窯によって壊されていたら、G窯を壊してF窯を築いたわけですから、F窯の方が新しいとわかるわけです。もちろん、出土する陶片や窯の規模などから推測することはできます。でも、決め手となるのはそういった窯と窯との関係です。

物原から17～19世紀の陶片出土

次に出土品についてはまだ整理している段階ですから、概要だけ紹介します。砂床（焼成する製品を置くところ）からはあまり出土しませんでした。物原と思われるところから膨大な量の陶片が出土しています。それによると最も古い陶片で1640～1650年代のもので、高台部分を施釉していない碗や寿字文・網目文の碗が主な製品です。そして、いわゆる藍九谷様式、藍柿右衛門様式の製品が続き、以降、19世紀までの製品が物原に積み重なっていました。

物原からは出土しませんでした。明治時代の型紙摺りの製品が地表にみられますので、恐らく南川原窯ノ辻窯は17世紀の中ごろから明治時代にかけて操業した窯場であると推定されます。この窯場の特徴は磁器だけでなく、鉄釉陶器が多数焼かれていることです。こういった特徴は同じ南川原の樋口窯などでも見られます。

珍しい例として鍋島様式の写しの皿が一点出土しています。鍋島藩窯が大川内に移った後でも、19世紀になると前述の樋口窯などで鍋島写しが焼かれているのですが、今回は17世紀末～18世紀初めと思われる層からの出土でした。今後の研究が待たれます。

現在、出土資料は駒沢大学で整理中で平成5年に発掘報告書が刊行される予定です。

発掘れぽうと



百婆仙の碑



稗古場の報恩寺境内には「萬了妙泰道婆之塔」と記された石碑があります。これには文字が刻んでありますが、長い歳月を経て風化し判読するのが難しくなっています。しかしその内容は「有田皿山創業調子」によって、うかがい知ることができます。

宗伝と百婆仙の夫婦は朝鮮の深海という所の出身で、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592～1598）に従軍した武雄の領主後藤家信が帰国する際、武雄の広福寺の別宗和尚について日本にやってきました。そして、武雄市武内町の内田という所に土地を与えられ、そこで陶器を焼いて家信や別宗和尚に献上しました。そこで焼かれたものは宗伝の本名をとって「新太郎焼」と呼ばれたということです。元和4年（1618）10月29日に宗伝は亡くなり、その後百婆仙は子の平左衛門（宗海）と焼き物を作りますが、有田で良質の陶石が発見され磁器の生産が盛んになっていることを知り同族を率いて稗古場に移住しました。孫や多くの朝鮮人陶工から敬愛された百婆仙は、明暦2年（1656）3月10日、96歳で亡くなりました。

以上が碑文の意味するところですが、普通「百婆仙の碑」と呼ばれるこの石碑は宗伝と百婆仙の曾孫宗仙が、百婆仙の五十年忌に当たる宝永2年（1705）3月10日に建立したものです。宗伝と百婆仙の子が宗海、孫が湛丘で、報恩寺の墓地には「百婆仙の碑」と並んで「深菴宗海居士之塔」と「湛丘浄然禅士之塔」が建てられています。

街角の歴史

お知らせ

町内民俗調査

今月12日から8日間の予定で町内の民俗調査を行います。これは、今年度から4年間の計画で行われる調査の第一回目にあたるもので、駒沢大学の学生を中心に有田の民俗を拾い集めたいと考えています。「いつのころからかよく分からないけれど、ずっとこんなことをやっている」というようなこと等々、ぜひ教えてください。町の皆様のご協力をよろしくお願いします。

古窯跡詳細分布調査

11月4日より、戸杓向ノ原窯跡の発掘調査が始まりました。これに続いて、天神山窯・無患子谷窯・黒牟田新窯の調査も行います。現場で調査員を見かけたら、声をかけてください。現地の状況をご説明します。

おわび

皿山びとの歌No. 11で紹介しました「有田ぐんち」の写真は昭和3年のものではなく、昭和11年の誤りでした。おわびして訂正します。

白川の細流（せせらぎ）

早いものでもう師走。今年も残すところわずかひと月になってしまいました。これから何かと気ぜわしい日が続くようになりますね。

今年、年女だった私。歴史民俗資料館に就職も決まり、決して忘れることのできない素晴らしい年になりました。これからひと月、この一年を振り返って反省し、真摯な気持ちで新しい年を迎えたいと思っています。少し早いけれど、皆様もよいお年をお迎えくださいませ。（萬）

有田町歴史民俗資料館報 No.12

発行年月日 * 平成2年12月1日

編集・発行 * 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地
☎0955-43-2678